

九條本 『文選』 の識語の検討

著者	佐竹 保子
雑誌名	東北大学中国語学文学論集
巻	4
ページ	1-17
発行年	1999-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/48956

九條本『文選』の識語の検討

佐竹保子

一 はじめに

中国南朝の梁の時代、西暦六世紀の始め頃、のちに晩唐の杜牧に「南朝四百八十寺」と詠われる繁栄を示した都の建康（今の南京）で、詩文のアンソロジーが編まれた。紀元前五世紀頃から紀元六世紀初までの詩文七百五十二篇を、全三〇巻に収めた『文選』である。編者である梁の昭明太子蕭統は、文芸をこよなく愛する貴公子であり、そのサロンの貴族文人が実際の編纂を担当したと考えられる。

この『文選』については、数年前に中国で『文選学研究集成』叢書の刊行が企画され、昨一九九八年に中華書局から、『中外学者文選学論著索引』と『中外学者文選学論集』上下が出版されている。以後、(3) 文選学研究資料彙編、(4) 文選学書録、(5) 文選集校、(6) 文選彙注、(7) 文選唐注考、(8) 文選版本学、(9) 文選学発展史、(10) 文選編纂学、(11) 文選今注今訳、(12) 文選学詞典、などが陸續と発刊される予定であると、俞紹初・許逸民両氏による『『文選学研究集成』序』（既刊の二書に所収）に記されている。

いっぽう日本でも、一九九九年二月に富永一登『文選李善注の研究』（研文出版）、同年四月に岡村繁『文選の研究』（岩波書店）、同年一〇月に清水凱夫『新文選学——「文選」の新研究——』（研文出版）などの大著や力作が、きびすを接して刊行されている。富永著は、唐代の李善の注を詳細に検討しており、『文選』の受容史としての側面をも持つ。また岡村著は、序章「『文選学』の歴史と課題」の第二節「科举と『文選学』」から第四節「近來の『文選』研究とその課題」までを受容史の記述に当てている。のみならず、岡村著第一章「『文選』編纂の実態と編纂当初の『文選』評価」の第二節「『文選』に対する六朝末期の文壇の反応」や、第二章「『文選』と『玉台新詠』」、第三章「さまよえる『文選』——南北朝末期における文学の動向と『文選学』の成立——」、第四章「細川家永青文庫蔵『敦煌本文選注』について——唐代初期における『文選』注解の片影——」、第六

章『文選』李善注の編修過程——その緯書引用の仕方を例として——」、第七章『文選集注』と宋明版行の李善注」も、受容史への周到な目配りのもとに考察が進められている。

『文選』は、中国の文芸作品としては、その古さも規模も『詩経』『楚辞』に次ぐ位置にある。そうした古典であれば、『文選』それ自体への検討（清水著は、もっぱらこれを主題とする）はもとよりのことだが、後世の人々がそれをどう読みいかに享受していったかという受容史の研究もまた、前者に劣らず重要なものとなる。

小稿もまた、『文選』の受容史の一端を考えようとするものである。ただ、富永著や岡村著、さらに『中外学者文選学論集』上下に収められる論文の多くが、『文選』の中国における受容史を記述しているのに対し、小稿は、日本におけるそれを対象として取り上げたい。

二 日本における『文選』の受容

『文選』は遣隋使や遣唐使によって、日本にももたらされている。その伝来を窺わせる最古の例は、推古天皇の一二年（六〇四）に定められたとされる「憲法十七條」である。その第五条に「絶饕餮欲、明弁訴訟。…頃治訟者、得利為常、見賄聽讞。便有財之訟、如石投水、乏者之訴、似水投石」（貪欲を絶ち、公明正大に裁きを行え。…近頃の裁判官は、私腹を肥やすのを普通と考え、賄賂を見てから訴えを聴く。だから富者の訴えは、石を水に投げるようだが、貧者の訴えは、水を石に注ぐのに似る）とあり、これについて岡田正之『日本漢文学史 増訂版』（吉川弘文館、一九五四）一七一頁が次のように記している。

「即ち聖徳太子の憲法十七條に、／有財之訟如石投水。乏者訴似水投石。／とあるは、魏の李康の『運命論』の文に、／其言也、如以水投石、莫之受也。…其言也、如以石投水、莫之逆也。／とあるに取らせ給ひたるものなれば、明に文選の伝来を証するものなり」。

李康「運命論」は、三〇卷『文選』では卷二七に収められる。所引部分の水と石の比喻については、李善や他の学者も基づく所を注記しておらず、「運命論」の独創であった可能性が高い。さらに「運命論」が、現存の古籍では『文選』と『芸文類聚』にしか収められておらず、後者の『芸文類聚』の上奏が『唐会要』卷三六の記すように唐の武徳七年（六二四）で、「憲法十七條」より二〇年も後であることを考え併せれば、「憲法十七條」第五条の比喻の出处を『文選』所収の「運命論」とする岡田説は、かなりの妥当性を持ち得る。

「憲法十七條」以後では、天平年間（七二九～七四九）の日付のある正倉院古文書に、『文選』を書写したという記録がいくつか残っている。加えて、『続日本紀』卷三五、『続

日本後紀』巻九と巻一二、『菅家文草』巻六、『延喜式』巻二〇「大学寮」の「講書」の条り、『令集解』巻一七「選叙令」の「秀才進士條」、『文徳実録』巻三と巻八、『日本三代実録』巻四五、『日本紀略前篇』巻二〇、藤原明衡編『本朝文粹』巻七「書状」所収の大江匡衡の手紙などにも、『文選』を学んだり、講じたり、暗誦したりしたとの記載がある。大江匡衡の妻である赤染衛門とともに平安女流文学を担った清少納言が、『枕草子』第二一段に次のように書いているのも、周知の事実であろう。「書（ふみ）は文集（もんじふ）、文選、新賦、史記五帝本紀、願文、表、博士の申文」（池田亀鑑校訂岩波文庫本）。

かく奈良朝以後の日本では、『文選』が珍重され、学習され、抄写されていた。先述の正倉院古文書の記録からも、『文選』の抄本は数多あったと推測される。だが現在、そのほとんどが散逸してしまっている。ただし中で、比較的大部な写本が二点、我々の手元にいまなお残されている。『文選集注』一二〇巻の残巻と、無注本『文選』三〇巻の残巻である。

平安時代の写本と目されている『文選集注』は、李善注や五臣注以外にも、唐以前の中国の学者たちの注を収める。それらの多くが本国では失われているから、中国の古注や、古い時代の『文選』本文の様相をうかがうには欠かせない、きわめて重要な資料となっている。

いっぽう無注本『文選』は、九條家伝来のため普通「九條本」と称され、巻末の多くに平安朝末期から南北朝初期の元号のある識語を備える。本文の諸処に注の書き入れがあるが、それらはおおむね『文選集注』や板本『文選』所収の注の範囲を出ない。だから中国の古注を検討する上で、九條本『文選』は『文選集注』ほどに有効ではない。

では九條本『文選』の本文そのものはどうか。本文は「無注本三十巻本を伝写し来れるものであらう」（斯波六郎「九條本文選解説」（1））、すなわち「這個抄本出于李善未注以前的三十巻本」（屈守元「跋日本古抄無注三十巻本《文選》」（2））と考えられている。だが同時に、「幾度か伝写せられてをる間に、当時新渡来の板本などから影響を受けたところが、無きにしもあらずと思はれる」（前掲斯波論文）。従って、どの部分が原貌でどの部分が板本からの影響か、今後精密な調査を必要とするが、いずれにせよ考察に多く臆測が混じりがちになるのは免れない。しかも九條本『文選』は、『文選集注』の残存部分と一致する箇所が少なくない。もっとも『文選集注』の残存部分がきわめて限られているので十分な照合は困難なのだが、それにしても、あるいは『文選集注』をもとにして「新渡来の板本」から影響を受けた本と考えられないこともなく、予断を許さない。要するに、九條本『文選』の本文はその素性がなお不明なので、いまだ資料として有効に活かせる状態にないと言える。

しかし、その代わり九條本は、先述したように、巻末の多くにそれを書写した日本人の識語を残す。いわば、日本における『文選』受容の息吹きを直接に伝える本である。従って受容史を考察する側面から見れば、これもきわめて貴重な資料と言いうるのである。

九條本『文選』の識語は達筆の行書で記される。その活字起こしは、一九六七年に小林芳規『平安鎌倉時代における漢籍訓読の国語史的研究』（東京大学出版会）で既に試みられている。だが、その内容の詳細な検討は、該書においても、その後の研究においても、管見の限り為されたことが無かったようだ。小稿は、この九條本『文選』の識語を検討することによって、日本における『文選』受容の一端を考察しようとする試みである。

三 九條本『文選』の識語

九條本『文選』の原本は東山御文庫に蔵されており、我々には容易に目撃できない。だが幸いにも、その写真版が『九條本文選抄』八冊本として一九六二年に作製されており、いくつかの図書館に入っている。小稿では、その東北大学図書館蔵本（本館 丁 B・2・4・1・49）を用いる。

九條本『文選』は元来無注の三〇巻本だが、以下の八巻が欠本となっている。すなわち、巻第五、巻第六、巻第九、巻第二四から巻第二八まで、及び最後の巻第三〇の八巻である。また巻第一六は、後半部が欠本なので識語の部分も欠落しており、さらに巻第八、巻第二一、巻第二二は現存しているのだが、識語が記されていない。よってここでは、巻第一から巻第四、巻第七、巻第一〇から巻第一五、巻第一七から巻第二〇、巻第二三、巻第二九の、計一七巻分の識語が検討の対象となる。

先述のようにこれらの識語は、前掲小林著の「附録 I 漢籍古點本奥書識語集」一四九三頁から一四九五頁において、巻ごとにそのまま活字に起こされている。ここで巻ごとに識語を掲げればその重複となる。そこでここでは、巻ごとではなく時代順に掲げて番号を付し、さらにそれらの句読点を切り、現代日本語に訳して、以下に示すこととする。

これらのうちいくつかの識語は、署名の同一性や記載された年月日の近似性によってあるまとまりを為す。それらを一つの群と見なし、それぞれの群ごとに考察を加える。

時には、当面考察中の識語の語や内容が、後出する別の群の識語と対応することがある。その場合は、考察部分に、後出する識語の番号を記して説明せざるを得ない。そのためその番号の識語を小稿の後述部分から探す手間を、読者諸兄姉に強いることになるが、その点をどうぞご寛恕いただきたい。また、前掲小林著の読みへの疑問も数力所あり、考察部分では、それらも併せて考えていきたい。

もとより筆者は日本の中世史学や中世文学の素養に乏しく、考察に多々誤りをおかしている恐れが大きい。そうした誤りについては、専門家の批正を切にお願い申しあげる次第である。

01 卷第一九／康和元年九月廿日巳刻、書了。

康和元年（一〇九九）九月二〇日巳の刻（午前一〇時前後）に書写完了。

02 卷第一七／保延二年正月廿三日午時、所読了。

保延二年（一一三六）正月二三日午時（正午）に読了。

03 卷第一七／保元二年二月廿三日、見合證本了。

保元二年（一一五七）二月二三日に、拠り所となる善本との校勘完了。

04 卷第一七／借請菅冠者之本、加一見了。公重。

菅冠者の本を借り受けて、一度校勘を加えた。公重。

01 から 03 に至る一一世紀末から一二世紀中盤までの識語には、署名がない。04 のみ「公重」と署名があるが、同じ巻一七の識語でも、02 や 03 とは筆跡が異なるように見える。いずれにせよ、どういう素性の「公重」であるのか判断がつかない。ただ、以下の九條本の識語には、『本朝文粹』の編者である藤原明衡を祖とする藤原式家の者の署名が圧倒的に多い。小稿末の付図も併せて参照されたいが、たとえば 05 の藤原宗光、11 から 14 までと 17 から 18 までの藤原長英、19 から 29 までの藤原師英など。09 の藤原相房も、『尊卑分脈』には名が無いが、前掲小林著一一六九頁に式家の学者と認める記述がある。01 から 03 の字体も 05 の宗光のそれに似ている。01 から 03 の識語は、当時の式家の者によって書かれた可能性が大きいだろう。

03 の「證本」とは、09 に「菅江両家の證本を以て、校合し、書写し了んぬ」とあり、05 に式家の宗光が「菅給料家本を以て、寫點し了んぬ」と記しているから、大江家か菅原家所有の『文選』の善本であつたろうと考えられる。

05 卷第二〇／承安二年壬辰閏十二月廿一日、以菅給料家本、寫點了。安紀宗光、生年十八。承安二年後十二月晦日、奉授正親町大夫了。

承安二年（一一七二）壬辰閏一二月二一日に、菅給料家蔵本によって、書写付点した。安紀宗光、一八歳。承安二年閏一二月三一日に、正親町大夫にご教授申し上げた。

一八歳の「宗光」少年とは、藤原式家明衡の六代目の子孫で、尊経閣本白氏文集巻六〇の識語に署名のある式家敦光の直系五代目の子孫でもある、式家宗光のことだろう。国史大系本『尊卑分脈』第二篇五三二頁に名前が見え、年代がほぼ合う。従五位上、筑後守になったと記される。菅原家の善本を書写付点したのと同じ年に、「正親町大夫」に教授し

たのも一八歳の「宗光」であるとすれば、かなり早熟の秀才であったことになる。

問題は彼の教授を受けたという「正親町大夫」である。『尊卑分脈』第一篇一三九頁によれば、「正親町」を初めて名乗ったのは「正親町三條」の藤原公氏であるが、公氏は嘉禎三年（一二三七）に六六歳で亡くなっているから、一一七二年には生まれたばかりということになる。『公卿補任』では卒年は同じだが享年が五五歳とあり、なお年代が合わない。正親町公氏は「中宮大夫」や「皇后宮大夫」を歴任しているから、「正親町大夫」と称されるに相応しい人物なのだが、年代の齟齬は如何ともしがたい。教示を待つばかりである。

06 卷第一五／本奥云、養和二年五月廿六日、於洞院亭、書了。七月朔日、墨點了。散位菅以業。

元々の奥書にいう「養和二年（一一八二）五月二六日、洞院亭にて書写完了。七月一日に墨書での付点完了。散位菅以業」。

07 卷第一五／建久三年十一月十四日、以家説、授筑州別駕了。散位菅一。

建久三年（一一九二）十一月一日、家学の説を筑州別駕に教授した。散位菅一。

06 と 07 は一続きで、「本奥云う」が最後までかかっている。「本奥」をも生かして奥書を重ね書きしたのは、正慶二年（一三三三）の時点の藤原式家師英（27 参照）か、さらにその後に筆写して識語を書かなかった人物である。

07 の最後の線は 06 の「以業」の省略と考えられる。「菅以業」は、『尊卑分脈』に見出せない。おそらく、藤原式家明衡の養子となった菅原明業（付図参照）ゆかりの人物ではあるまいか。式家の本とのつながりと、名前の「業」という共通の一字からそう判断される。藤原明衡は九八九年に生まれ一〇六六年に死んでいるから、一一八二年に『文選』を書写しその一〇年後に「筑州別駕」に教授した「以業」なる人物は、明衡の養子である明業からさらに四世代ほど後の人ということになる。05 の式家宗光とは、ほぼ同世代に属す。おそらく宗光の借りた菅原家の善本を、菅原以業も書写しており、それを北九州の一地方官に伝授したのではなかろうか。

08 卷第二三／弘安三年無射十八日、以家秘説、奉授秋田城務好士、既訖。前吏部少卿諸範[花押]。

弘安三年（一二八〇）九月一八日、家学の秘説を、秋田城務の好き士にご教授申し上げ、完了した。前吏部少卿諸範[花押]。

「前吏部少卿諸範」とは誰か。『尊卑分脈』第二篇四七〇頁に藤原南家の「諸範」の名があり（付図も参照）、「刑部卿 正四下 式部少甫」という官位名が記される。「式部少甫」の中国名が「吏部少卿」だから、識語の「諸範」とは、藤原南家の諸範に間違いない

だろう。

諸範が教授した「秋田城務」とは「秋田城介」のことで、一二八〇年当時の秋田城介とは、安達泰盛に特定できる。『関東評定衆伝』巻二(3)の「弘安三年」の件に、「評定衆」として「秋田城介藤原泰盛 五番引付頭」の名があるからだ。

「藤原泰盛」とは、『尊卑分脈』第二篇二八六頁にある安達泰盛のことである。安達氏は、泰盛の祖父の景盛が建保六年(一二一八)に秋田城介に任ぜられて(4)以来、景盛から四代目の宗景が弘安八年(一二八五)に誅殺されるまで、代々これを世襲している。三代目の泰盛は、建長六年(一二五四)に秋田城介となり、弘安五年(一二八二)に息子の宗景に譲り、その三年後に息子ともども殺されている(5)。

08の巻二三の識語から、都の博士家が東国の武将に中国古典を教授したことが知られるが、これと類似の事象がほぼ同時期に見出される。清原家の教隆が北条実時の師匠として寛元五年(一二四七)に『古文孝経』を、建長七年(一二五五)に『群書治要』を教授し(6)、教隆の息子の直隆が実時の息子の篤時に文永六年(一二六九)に『春秋経伝集解』を(7)、永仁六年(一二九八)に『古文孝経』を(8)、同じく教隆の息子の俊隆が篤時に弘安元年(一二七八)に『春秋経伝集解』を(9)教授している。また藤原諸範の兄の茂範も、北条実時のために『群書治要』に付点している(10)。以上はそれぞれの写本の識語から窺われる。清原家の教隆・直隆・俊隆および藤原南家の茂範は、中国古典籍における、金沢北条氏の師匠たちだったのである。

上述の清原教隆の祖父が、謹厳な経学者として名高い清原頼業である(付図参照)。頼業の娘たちは、『尊卑分脈』第二篇四六七頁によれば、藤原南家の光範とその子の頼範に嫁いでいる。光範とは、08の『文選』巻二三の識語にあった「諸範」の祖父の兄、すなわち大伯父にほかならない。つまり清原教隆は、諸範の祖父の義理の甥であると同時に、諸範の父の従兄弟の義兄弟に当たる。両家は、教隆の叔母たちによって二重の姻戚関係に結ばれている。その両家がほぼ同じ時期に、清原氏は東国の金沢北条氏へ、藤原南家の兄も金沢北条氏へ、南家の弟はさらに東国の秋田安達氏へ、それぞれ中国古典を教授しているのである。一三世紀後半における中国古典学習の、西から東へ、また堂上公家から武家への伝播が、象徴的に看取される事象である。

さらに付言すれば、この金沢北条氏ゆかりの金沢文庫には、以後、当該の九條本『文選』とはまた異なる系統の宋版の五臣李善注『文選』六〇巻や、平安写本『文選集注』一二〇巻の断簡などが大事に蔵され、かくて中国本土で失われた善本が日本で見出されることとなる。そうした中国古典を珍重する気風の端緒が、あるいはこの九條本『文選』巻二三の識語に示されているのかもしれない。

09 卷第一／本云、弘安八年六月廿五日、以菅江兩家證本、校合、書写了。散位藤原相房。

元々の奥書にいう「弘安八年（一二八五）六月二五日、菅原・大江兩家所藏の（拠り所となる）善本によって校勘し、書写を完了した。散位 藤原相房」

10 卷第二九／正應二年己丑十一月六日、自巳刻終至子時半分終書功。於京洛大宮宿房、以大内記吏部侍郎本、書写畢。十一日加朱點已了。

正應二年（一二八九）己丑十一月六日に、午前一二時頃から午後一二時頃まで書写した。みやこの大宮の宿直室で、大内記吏部侍郎の本を借り、書写を完了した。一日に朱筆による付点を加え終えた。

09 の「藤原相房」は『尊卑分脈』に見出せないが、先述のように、前掲小林著一一六九頁では式家の学者と認めている。これに従えば、11 以後に頻出する「長英」とはほぼ同世代の同族ということになる。

10 に署名がないが、01 から 03 までの考察に示した理由により、とりあえず式家の学者と考えておく。「大内記吏部侍郎」も不明だが、筆記者の基づいた「大内記吏部侍郎本」とは、05 や 09 の識語から見て大江家か菅原家の所蔵本である可能性が高い。よって「大内記吏部侍郎」とは両家のどちらかに属する人物と考えられるが、『尊卑分脈』に見る限り、大江氏には「大内記」や式部官への就任者が極めて少ない。これに対し菅原氏には多く、中で識語の年代に合う人物としては、「侍読後宇多御書所開闔 東宮学士 式部少甫 大内記 従四位下」であった「在守」（『尊卑分脈』第四篇六七頁）と、「侍読後宇多 長者 文章博士 大内記 従三 式部権大甫 縫殿助」であった「在公」（同七〇頁）が見出される。「在守」は菅原孝標から数えて九代目、「在公」は八代目で、ともに本人たちの生卒年は不明だが、「在守」の父の「在章」が文永五年（一二六八）に六二歳で、「在公」の場合は長男の「在輔」が元応二年（一三二〇）に七四歳で、それぞれ亡くなっているから、一二八九年当時の「在守」「在公」は、どちらも分別盛りの年齢域に入り得る。

10 の識語を書いた式家の学者は、おそらく菅原家の善本を借り、正午から深夜まで書写をつづけ、李善注『文選』では卷五七と卷五九の二卷分にあたる長文を写し取った。その熱心さは並大抵ではなかったと判断できるだろう。

11 卷第四／本云、正應五年二月廿八日、書寫畢。散位藤長英 在判。同六月廿五日、校點畢。同王六月三日、點畢。右判。同廿二日、付尺音畢。長英。

元々の奥書にいう「正應五年（一二九二）二月二八日に、書写完了。散位 藤長英 在判。同六月二五日、校勘と付点が完了。同閏六月三日、付点完了。在判。同二二日、

語釈と読み音の書き込み完了。長英」

12 卷第一／正應五年五月九日、點了文選。十二三歳之時、兩年、以自筆令書写、受嚴君之說了。而先年甘繩回祿之時、皆以爲灰燼了。仍爲授幼稚所令校點了。散位藤長英。

正應五年（一二九二）五月九日に、『文選』の付点完了。一二・三歳の時に、二年かけて、自筆で書写させられ、父上（藤原基長）の説を受けた。だが先年、甘繩（不明）が火事にあった時に、（それらの筆写本は）すべて灰燼に帰した。そこで幼な子（子の師英か、21 参照）に授けるために、校勘付点させた次第である。散位藤長英。

13 卷第七／正應五年八月十六日、書写畢。于時久就病席、屢染疎毫、宿好之主、愁篤只且了。散位藤原長英。

正應五年（一二九二）八月一六日に、書写完了。折しも久しく病の床にあったが、しばしば筆を取ったので、昔馴染みのおんあるじが、病が重くなるのをひたすら心配してくれた。散位藤原長英。

14 卷第十／本云、本云、正應五年十月二日丑剋、書写了。此書、曾祖父一筆也、而上祿紛失之間、爲備欠失、所令書写了。散位藤原長英。

元々の奥書にいう「元々の奥書にいう『正應五年（一二九二）一〇月二日丑の刻（午前二時前後）に、書写完了。この書は、曾祖父（式家の敦綱のはず）の筆になるものだったが、上帙が無くなってしまったので、亡失に備えて、書写させた次第である。散位藤原長英』」。

15 卷第七／正應五年十月六日、雨中書写畢。源信元。同八日墨黙了。在一。同十一日付尺音了。信元。同十四日朱黙了。信元。同十五日ヒ下注付了。信元。同十七日一校了。信元。

正應五年（一二九二）一〇月六日、雨の中を書写完了。源信元。同八日、墨書での付点完了。在一。同十一日、語釈と読み音の書き込み完了。信元。同一四日、朱筆での付点完了。信元。同一五日、燈火のもとで注釈の書き込み完了。信元。同一七日、読み直し完了。信元。

以上は、一二九二年の二月から一〇月にかけての識語である。これらの検討に入る前に、些細だが説明しておくべきことがある。一つは、11 について。「六月廿五日、校點畢んぬ」と記しながら、一〇日も経たないうちに再度「點畢んぬ」とある。写真版で見ても、後者の一文は他より淡く写っているから、前掲小林著一四九四頁にあるように、墨書ではなく朱書と見られ、したがって後者のいう「點」は「朱點」、前者の「六月廿五日」の「點」は「墨點」の意と考えられる。二つ目は、15 の「墨黙了」「朱黙了」について。

「黙」字は「點」字の誤記であろう。三つ目は、同じく 15 の「ヒ下注付了」について。前掲小林著一四九四頁は、「ヒ」字の下に「(燈か)」と入れており、この推測が正しいと考える。

さて以上五件の識語から読みとれることは、家学の継承のされ方およびその学習の仕方である。14 から窺えるように、『文選』巻一〇については、「曾祖父」すなわち式家明衡から数えて四代目の敦綱に写本があり、また 12 からは、巻一について、七代目の長英と八代目の師英の写本があったと分かる。12 にはさらに、長英が「自筆を以て書写せしめられ、嚴君の説を受け了んぬ」と記しているから、長英が臨模したのは「嚴君」、すなわち六代目の基長の写本であった可能性が高い。つまり、式家の者たちは代々『文選』を学習するに当たって、その全部または一部を、自筆で書写していたのではない。

長文の本文と、墨点、朱点、時には語釈や読み音、注釈までも書写するのは容易な作業ではない。意味を理解しながらならなおのことである。第一章に述べたように、『文選』は中国の南朝後期に皇太子とそのサロンの貴族文人によって編纂されている。南朝後期とは、修辞学が極度に発達し、典麗だが難解な美文が貴族間でもてはやされた時期である。

『文選』は日本人にとって、中国古典文芸の中でも、もっとも複雑で難解な書の一つと言える。だが 12 にあるように、式家の長英は、その難解な外国書籍を、「十二三歳之時」に、書写し理解しようとしていた。長英自身、この書を「幼稚」に教授している。「幼稚」という貶辞めいた語を用いるからには、他家ではなく自家の幼子であろう。もっとも可能性があるのは、同じ巻一に識語を残す(21 参照)、長英の息子の師英である。彼が『文選』を学んだのも、長英「十二三歳之時」とさほど変わらない、いとけない年頃だったに相違ない。

長英は「十二三歳之時」のみならず、11 にあるように、長じてからも『文選』の書写を続けている。それは学習のためというより「欠失に備えんが為め」(14 参照)であったりするが、時には 14 にあるように「丑の刻」と、文字通り丑三つ時まで書写を続けさせたり、13 にあるように「久しく病の席に就くも、屢しば疎毫を染む」と病をおして行ったりしている。その専心のほどが窺える。

上の 13 と 15 は奇妙な位置関係にある。ともに巻七の識語なのだが、時間的に遅い 15 が 13 の前に記されている。あるいは病をおして敢行した長英の書写が不完全であったために、15 の「源信元」が一ヶ月後にそれを補い、墨点・朱点・音釈に注まで付して完成させたのだろうか。そうとすれば、13 の時点で長英の病を「愁」えていた「宿好之主」とは、「源信元」だったのかもしれない。「源信元」という名は、『尊卑分脈』に一個所だけ見える。第三篇二七〇頁に、清和源氏畠山高国の法名として出ているものである。だが、

畠山高国は観応二年（一三五―）に四七歳で死んでいるから、識語の書かれた正応五年（一二九二年）にはまだ生まれていない。識語の「源信元」は不明である。とはいえ、先述のように「點」字を「黙」と書き誤ったり、「燈」の意で片仮名を用いたりしている所から、式家の人々の素養には少々及ばない、だが式家の周辺にいた人物だったと考えられる。

16 卷第三／本云、永仁七年三月廿五日、黙畢。同廿七日、黙畢。

元々の奥書にいう「永仁七年（一二九九）三月二五日、付点完了。同二七日、付点完了」。

17 卷第四／乾元二年閏四月七日、授申千手才子畢。前對州刺史長英。

乾元二年（一三〇三）閏四月七日、千手の才子にご教授申し上げた。もとの對馬の守長英。

18 卷第四／徳治二年十二月十一日、授申垂水藤才子畢。散位長英。

徳治二年（一三〇七）一二月一日、垂水の藤才子にご教授申し上げた。散位 長英。

16 の「廿七日」付けの「黙畢」は、「廿五日」付けのそれより写りが淡い。前掲小林著一四九四頁に「（朱か）」とあるように、朱筆であると考えられる。またこの「黙」字も「點」字の誤記であることから、16 も 15 同様「源信元」の識語であり、「信元」が式家長英のために付点した可能性が高い。

17 と 18 は長英の識語であるが、中の「千手才子」「垂水藤才子」について問題がある。というのも、前掲小林著三四頁～三七頁が 18 を「父子相承の記事」の事例に含め、「垂水藤才子」を長英の「子」と見ているからである。しかも同著「父子相承の事例」には、17・18 に先だって、永仁二年（一二九四）に長英が『古文尚書』を「池内藤才子に授け申し了んぬ」という識語が挙げられ、「池内藤才子」に「（師英か）」と記されている。

だが、「池内藤才子」や「垂水藤才子」、「千手才子」が長英の子であったり、まして師英である可能性は極めて少ないだろう。なぜなら識語は「垂水藤才子」「池内藤才子」「千手才子」に対して「授申」と敬語を用いているのだから。前掲小林著の三四頁～三七頁や当時の識語を網羅している一四三二頁～一五〇四頁を見る限り、明らかに子や孫に授けたと分かる識語には、「申」という語が用いられていない。例えば、長久二年（一〇四一）頃の藤原正家の識語には「授孫顯業了」、保延六年（一一四〇）の「李部少卿知明」の識語には「授三男敦真了」、弘安四年（一二八一）の中原師種の識語には「以累祖秘説授愚息筑前權守師國了」、永仁五年（一二九七）の中原師国の識語には「以累家秘説授愚息師言訖」、延慶四年（一三一―）の清原教宗の識語には「以南堂十代秘説重授愚息外史二千石繁隆畢」、延文元年（一三五六）の清原教氏の識語には「授于愚息豐隆了」とある。

同様に、我が子に「才子」という美称を付すことも、中国風の礼法に厳しい博士家であれば、ほとんど考えられない。中原師種、師国や清原教宗、教氏らが我が子を「愚息」と称している事も参考になる。

おそらく 17・18 で長英が教授した相手は、官位が記されていないことから見ても、同族の御曹司、しかも、せいぜい対馬の守に任官した程度の長英よりはるかに身分の高い人物の子息であっただろう。

19 卷第二／正慶元年大呂五日、書完了。散位藤原師英。同廿三日、寫墨點、同勘物了。師英。同夜半、朱點畢。師英。

正慶元年（一三三二）二月五日に、書写完了。散位 藤原師英。同月二三日に墨書で付点を写し校勘した。師英。同夜半に、朱点を付し終わった。師英。

20 卷第七／正慶二年大蔭廿四日、書完了。于時白雪紛々、紅燭耿々而已。散位藤原師英。翌朝墨點了。師英。同時朱點了。師英。

正慶二年（一三三三）一月二四日、書写完了。折しも白い雪がひらひら舞い、紅い燭火がこうこうと輝いている。散位 藤原師英。翌朝 墨点を付し終わった。師英。同時に朱点を付し終わった。師英。

21 卷第一／正慶二年二月十四日書完了。散位藤原師英。翌朝寫朱墨兩點勘物了。師英。

正慶二年（一三三三）二月一四日に書写完了。散位 藤原師英。翌朝 朱点と墨点を書き入れ校勘した。師英。

22 卷第十／本云、正慶二年後二月十二日、書完了。同日、朱墨兩點了。散位藤原師英。

元々の奥書にいう「正慶二年（一三三三）閏二月一二日に、書写完了。同日、朱点と墨点を付した。散位 藤原師英」。

23 卷第十一／本云、正慶二年後二月十七日夜半、書完了。散位藤原師英。判。同時墨點了。師英。同時朱點了。師英。

元々の奥書にいう「正慶二年（一三三三）閏二月一七日夜半に、書写完了。散位 藤原師英。判。同時に墨点を付した。師英。同時に朱点を付した。師英」。

24 卷第十二／本云、正慶二年三月十一日子刻、書完了。散位藤原師英 判。同朝朱墨兩點了。

元々の奥書にいう「正慶二年（一三三三）三月一一日子の刻（午後一二時前後）、書写完了。散位 藤原師英 判。同じ朝に朱点と墨点を付した」。

25 卷第十三／正慶二年三月廿八日夜半、書写之訖。散位藤原師英。判。翌日兩點了。

師英。

正慶二年（一三三三）三月二八日夜半に、書写を完了した。散位 藤原師英。判。翌日（朱と墨との）両点を付した。師英。

26 卷第十四／本云、正慶二年仲呂十一日、書寫了。散位藤原師英。判。同日朱墨両點了。師英。

元来の奥書にいう「正慶二年（一三三三）四月一日、書写完了。散位 藤原師英。判。同じ日に朱墨の両点を付した。師英」。

27 卷第十五／正慶二年四月廿五日、書写了。散位藤原師英 右判。同日、朱墨両點了。師英。

正慶二年（一三三三）四月二五日に、書写完了。散位 藤原師英 右判。同じ日に、朱墨の両点を付した。師英。

上の 21 を、前掲小林著一四九三頁は「正慶五年」と読んでいる。だが、写真版のこの漢数字は「二」と読めないこともなく、「正慶二年」とすべきかと思われる。「正慶」は北朝の光厳天皇の元号で、光厳帝は正慶二年に廃されているから、実質的に二年しかない。ただ三年目以後も、師英が南朝の元号である「建武」を用いる事を拒絶して、建武三年を「正慶五年」と称したと考えられないこともない。しかし、九條本『文選』の識語全体の流れから見ても、21 は「正慶五年」ではなく「正慶二年」とするほうがより適切と考えられる。しかもこの「正慶二年」は師英にとって意外に大きな問題を孕んでいるかも知れない。以下にそのことを述べる。

師英の識語にはほかに、康永二年（一三四三）に書かれた次の 28 がある。

28 卷第十八／本云、康永二年六月十九日、拭細汗、勵抄書了。前但州刺史師英。同七月廿三日、於三条坊御学問所、寫了。師英。同廿七日、朱點了。師英。

元来の奥書にいう「康永二年（一三四三）六月一九日に、細く伝う汗を拭い、がんばって書写した。もとの但馬の守 師英。同年七月二三日に、三条坊の御学問所で、書写完了。師英。同月二七日に、朱点を付した。師英」。

この 28 及び 01 から 19 までの他の識語に較べて、20 から 27 までの識語の内容には際だった特徴がある。書写から付点完了までの時間が異様に短いことである。

たとえば 20 では一月二四日に書写を完了し、翌朝には墨点と朱点を付し終えている。22 では閏二月一二日に書写を、同じ日に朱墨の付点を完了、23 では閏二月一七日夜半に書写、同時に朱墨付点、24 では三月一日深夜に書写、翌朝に朱墨付点、25 では三月二八日夜半に書写、翌日に朱墨付点、26 では四月一日に書写、同日に朱墨付点、27 では四月二五日に書写、同日に朱墨付点を、それぞれ完了している。いずれも書写完了から付

点完了まで一日かかっていない。

これに対し、06 の菅以業の識語では五月二六日に書写完了、七月一日に墨点を付し終えている。10 の無名氏の識語では一月六日の深夜に書写完了、同一日に朱点を付し終わり、11 の藤原長英の識語では二月二八日に書写完了、六月二五日に墨点を、閏六月三日に朱点を付し終わり、15 の源信元の識語では一〇月六日に書写完了、同八日に墨点を、同一四日に朱点を付し終わり、16 の同じく源信元の書と見られる識語でも、三月二五日に墨点、同二七日に朱点を付し終わっている。先述のように長英を助けたと考えられる源信元でも、書写完了から付点完了まで少なく見積もっても二日、15 では八日かかっている。菅以業や長英に至っては、一ヶ月以上の間を置いている。

では藤原師英の作業はいつも一日以内なのか。同じ師英の書写でも、19 の正慶元年（一三三二）の識語では一二月五日に書写を完了してから半月以上置いて、同二三日に朱墨付点を完了している。28 の康永三年（一三四三）のそれでも七月二三日に書写を完了し、その四日後に朱点を付し終えている。

つまり師英は 20 から 27 までの正慶二年（一三三三）に限って写本作業を猛スピードで敢行しているのである。問題の 21 も、「二月十四日書写し了んぬ」「翌朝朱墨両点を写し勘物し了んぬ」とあり、猛スピードの作業日程にぴたりと同調している。21 を「正慶二年」の識語と考える所以である。

師英の急ぎ振り、あるいは熱心さと言ってもよいが、それは正慶二年の写本作業がしばしば夜なべ仕事になっていることから窺える。20 では書写完了時が「白雪紛々、紅燭耿々たるのみ」という雪の夜で、「翌朝」には朱墨両点を付し終えている。23 にも「夜半に書写し了んぬ」、24 にも「子の刻にこれを書写し了んぬ」、25 にも「夜半にこれを書写し訖んぬ」とある。問題の 21「翌朝朱墨両点を写し勘物し了んぬ」とあるのも、書写完了後に夜なべをした可能性が高い。他方、九條本『文選』の他の人物の識語で、夜なべ仕事が表示されているのは、無名氏の 10 と長英の 14 の二件に止まる。

正慶二年の師英の作業が、かくも速かったのは何故か。まず考えられるのは、これが彼にとって『文選』の初めての書写ではなかったことだ。12 の長英の識語にあるように、師英は一二九二年の「幼稚」の頃すでに、父の長英に『文選』学を厳しく仕込まれていたはずだから。だが翻って、正慶二年から十年後に書かれた 28 に目を移せば、同じく師英の複数回目の書写であっても、これはそれほど速くはない。父の長英においても、たとえば 11 は初めての書写ではないはずだが、四ヶ月以上にわたってゆったりと時を費やしている。学への習熟は、必ずしも書写の迅速に結び付いていない。

「幼稚」の頃を一〇歳前後とすればすでに初老の域に入った師英が、正慶二年のこの時

期に限って、書写をかくも急いだのは何故か。あるいは、南北朝に分かれた当時の複雑な社会背景が影を落としていたのかも知れない。だがその調査と考察は、小稿の能力を超える。日本史学の専門家の示教を仰ぐばかりである。

四 結びに代えて——識語からうかがえる受容の状況

以上、九條本『文選』に記された、平安朝後期から南北朝初期にかけての二八件の識語を検討してきた。これらの識語からうかがえる学習主体や被教授者の中には、天皇を始めとする最上層の人々が見当たらない。

平安朝前期の段階では、たとえば弘仁一〇年（八一九）に嵯峨天皇が（『続日本後紀』巻一二）、仁寿元年（八五一）に文徳天皇が（『文徳実録』巻三）、元慶八年（八八四）には光孝天皇が（『日本三代実録』巻四五）、寛平八年（八九六）に斉世親王が（『日本紀略前篇』巻二〇）、長保四年（一〇〇二）以前には一条天皇（『本朝文粹』巻七）が、それぞれ『文選』を教授され、学習している。

ところが、一二世紀から一四世紀にかけての九條本『文選』では、教授されている最高位の人物が「正親町大夫」（05）であり、ついで「秋田城務」（08）、「筑州別駕」（07）、「千手才子」（17）、「垂水藤才子」（18）などの地方長官や次官、無官の御曹司たちだ。彼ら以外には、菅原家（06、07）、藤原南家（08）、藤原式家（09、11～14、17～28）などの中国古典籍の修得をなりわいとする博士家の者たちが、みずから学んだり、我が子に教授したりしているにすぎない。

これは九條本に限ったことではないようだ。前掲小林著二八頁から三一頁にかけて、一一世紀から一三世紀までに漢籍を「天皇に奉授した記事」が掲げられているが、それらの漢籍は『古文尚書』『古文孝経』『後漢書』『貞観政要』『帝範』『臣軌』『白氏文集』などで、『文選』は一例も見当たらない。同著三二頁から三四頁にある「公卿・将軍等の特定貴人に授けた記事」においても、『文選』が授けられた事例は、当該の九條本『文選』に関わる「正親町大夫」「秋田城務」「筑州別駕」への三例だけだ。ほかに「公卿・将軍等の特定貴人に授け」られた書籍には、上述の漢籍に加えて『春秋経伝集解』『論語』『群書治要』が挙げられている。四部分類でいえばもっとも正統的な経部が多く、治世に関わりのある子部（『帝範』『臣軌』『群書治要』）や史部（『貞観政要』）の書がこれに次ぐ。

平安後期は文化が唐風から和風に移行した時期である。とりわけ文芸方面では平仮名で綴られた女房文学が『源氏物語』という世界的な傑作を生み出した。文芸は和風が喜ばれつつあり、そうした時期に唐風に学ぶべきものは、聖人の言や治世の術に偏向していった

のだろう。

ただし、文芸関係では唯一『白氏文集』が教授されている。中世日本人の「長恨歌」や閑適詩への愛好を示すものだが、愛好された要因の一つに白詩の平易さがつねに挙げられることを考慮すれば、『白氏文集』愛好の所以はそのまま『文選』敬遠の所以に結び付く。『文選』は中国古典文芸の中でもっとも複雑難解なものの一つであり、平易簡明な白楽天文学の、いわば対極に位置しているからだ。

要するに、平安後期以後の上層貴族社会で『文選』はそうたいして好まれず、したがって学習の需要も少なかったのではないかと推量される。

だが、学習の需要が少なかったにも関わらず、藤原式家やそのゆかりの人々は『文選』を熱心に修めている。一〇歳前後のいとけない時期から学び始め（12）、菅原家や大江家の善本を借り出して校合し（03、04、05、09、10）、時には病をおして（13）、また時には何らかの事情に迫られていたかもしれないが夜を徹して（10、14、19、20、21、23、24、25）、老齢に至っても暑熱の季節に汗を拭いながら（28）精励している。中国のように科挙が確固たる制度として定着しておらず、したがって『文選』への習熟がそのまま栄達や栄誉の足がかりになるとは限らない国において。

さらに注目されるのは、彼らが東国の武将を教授の対象としている一件（08）である。第三章に述べたように、これは、一三世紀後半に中国古典学習が、西から東へ、また堂上公家から武家へと伝播する一環をなしている。のみならず、当該の九條本『文選』とはまた異なる系統の宋版五臣李善注『文選』六〇卷（いわゆる足利本『文選』）や平安写本『文選集注』一二〇卷が、東国の武家支配のもとで珍重される端緒の一つであったと見られる。

中央の博士家を小さな核としつつ、『文選』が、日本国内のより異質な、より周縁に位置する地域や階層に滲みわたっていくさまが、九條本『文選』の識語から彷彿されるのである。

注

- (1) 『文選索引附録』（一九五九年付けの「はしがき」を含む）一一頁。
- (2) 本文前掲『中外学者文選学論集』上四三二頁。初出は『文選学論文集』（時代文芸出版社、一九九二年）。
- (3) 『群書類従』第四輯補任部卷四九（続群書類従完成会。一九三二年。一九七七年訂正三版第三刷）による。なお「安達泰盛」に関する資料は、二〇年前に、中国文学

- (4) 『吾妻鏡』第二三、健保六年三月一六日の件りによる。
- (5) 以上、本文前掲『関東評定衆伝』と『尊卑分脈』による。
- (6) 本文前掲小林著一二六〇頁、一四六二頁、一四八〇頁。
- (7) 同一四五三頁。
- (8) 同一四六二頁。
- (9) 同一四四八～四九頁。
- (10) 同一四八一頁。

